

# 太宰府の文化財

321

## 大宰府条坊内の客館

### 朱雀3丁目(西鉄操車場跡)

### 奈良時代〜平安時代はじめ

西鉄操車場跡地は、平成8年の道路拡幅に先立つ調査を皮切りに、県道新設や西鉄の開発計画に伴って埋蔵文化財発掘調査を行ってきました。

複数の層をなす密度高い遺構と出土品の数々から古代大宰府の多くの情報が得られ、奈良時代については、大型南北建物群、佐波理と呼ばれる新羅



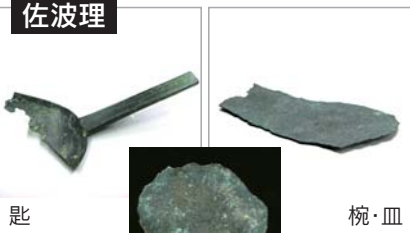
大型建物跡(南棟)



佐波理に盛り付けた食事  
(提供: (独)奈良文化財研究所)  
料理復元: 奥村彪生



漆器



佐波理

匙

碗・皿



碗・皿

碗

碗(加盤か?)

(古代韓国)の高級食器、文字を記した木簡、平安時代については、公卿(上級貴族)が着用した白玉帯など、これらでマスコミや広報で紹介しています。

新たな発見はその後も続きました。佐波理はそれまでに5点出土していたことがわかりました。加盤(碗)を入れ子に収納したもの、碗・皿、匙など、奈良の東大寺正倉院に収められているような食膳セツトがそろっています。高級食器・容器は佐波理だけではありません。漆器、奈良三彩、銅製容器・新羅土器など希少なものの類例の少ないものがあり、しかも香炉・火舎(火を入れるための脚付きの盤)といった特殊品も含まれています。これらは大宰府の官人たちが普通に使用できるようなものではありません。

これらを通してわかるのは、奈良時代から平安時代はじめにかけて、ここが特別な場所だったということです。場所の性格を示す直接の証拠は見つかっていませんが、古代の

都との比較を通して、外国使節を安置(宿泊した)「客館」の可能性が浮上しました。

当時の都は、宮殿を北に置き、宮殿から南に延びる幅広い朱雀大路(中央南北大路と条坊(碁盤目の街区)を持つています。条坊中央南寄り付近の朱雀大路脇の一画には、平安京(京都)では外国使節が滞在した「鴻臚館」が置かれ、平城京(奈良)でも「客館」が置かれたと考えられています。

大宰府も外国使節を迎えることでは平城京・平安京と同じです。また都のように政庁を北に据え、朱雀大路を備え、条坊を持つていたことも分かってきました。そして条坊中心付近の朱雀大路脇の一画から、大人数を収容できる格式高い建物と高級品の数々が確認されたのです。このように比較すると、ここが外国使節を安置し、また遣唐使も利用したような客館跡と考えられます。

なお東北の多賀城でも、中央南北大路脇に城下最大級の大型建物群が同様に立ち並ぶ一画が見つかっています。外国

辺境の人々を迎えるという役割は共通していることから、その関連も注目されます。

さて、福岡市の鴻臚館跡(奈良時代は筑紫館)はよく知られた客館跡ですが、奈良時代には両方の施設が連携して外国使節を迎えたと考えられます。海を渡ってきた外国使節はまず筑紫館に上陸・滞在します。そして大宰府での受け入れが決まると、水城西門を通る官道を通って条坊内の客館に入り、しばらく滞在した後、外交儀礼・饗宴のため大宰府政庁に上ったと想像されます。

この条坊内の客館と海沿いの筑紫館との関係は、まさに都(平城京・平安京)と難波館(大阪湾岸)の関係と共通するものです。

都城(条坊)内に設けられた客館の発掘事例は、東アジアでもほとんど知られていません。日本および東アジアの古代外交を知る上で、たいへん重要な遺跡といえます。

文化財課 井上 信正

# 太宰府の文化財

322

## 筑前国分寺跡の近くで 出土した木簡

（国分松本遺跡第11次調査 国分三丁目）

奈良時代

奈良時代、聖武天皇によって鎮護国家のために全国60余国に寺院の建立が命じられます（天平13年、国分寺建立の詔）。当時、太宰府市域は筑前国の範囲にあり、国分三丁四

丁目にはその時に建てられた国分寺と尼寺が文書資料や発掘調査で確認されています。平成21年度に行なった国分松本遺跡第11次調査は、筑前国分寺・国分尼寺を通る古代

の道路の南側に位置し、幅14mを超える大きな溝が確認されました。この溝からは、多量の弥生時代・奈良時代の土器とともに、木製品が出土しています。その中には、板に墨で字を書いたもの——木簡も見つかりました。

今回確認された木簡は3点です。1点目（写真①）は、

両面に文字が書かれています。片面には3文字が見えますが、

文字を確定することはできませんでした。1字目には「大」

や「九」、2字目には「次」や「夫」など、そして3字目には

「五」や「又」といった候補が挙げられます。裏面には、複

数の文字が重ねて書かれており、「論語学」や「第一」と読む

ことができます。この裏面の文字は、手習いのために書か

れたもの（習書木簡といま

す）で、内容は「論語」の「学而第一」\*に関連するようです。

2点目（写真②）は片面のみに5文字が見え、木簡の上部が折れていて一字目は不明

ですが、「二字目は「歛」の異体字で、以下「歛以奉上」と読む



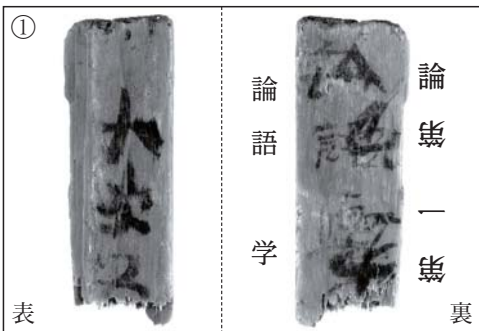
国分松本遺跡第11次調査地全景



ます。つまり、「歛をさし上げる」といった意味になります。3点目（写真③）は両面に文字があり、片面は3字で、2字目は「覚」と読め、その下は少し空けてから小さく「尔」と書かれています。「尔」は助詞にあたるもので、「に」という意味です。上の2文字はおそらく人名（僧の名前か）と考えられます。裏面には4文字が見え、「有政故也」と読めます。

これらはすべて大溝の奈良時代の層から出土しています。大溝は北東から西に向かって水が流れていたと考えられるので、木簡は当時上流側にあった筑前国分寺から流れてきたのかもしれない。市内では

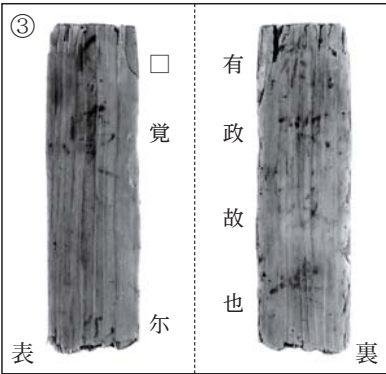
文化財課 遠藤 茜



▲1号木簡(長さ7.0cm)



▲2号木簡(長さ17cm)



▲3号木簡(長さ14cm)

# 太宰府の文化財

323

## 姿見井すがたみのい (国分2丁目)

太宰府市には菅原道真ゆかりの文化財が数多く残されています。水城東門跡付近にも衣掛(衣挂)天神や衣掛石など菅原道真にまつわる伝説地

が多く残されています。その中のひとつである「姿見井」には、次のような話が伝わっています。  
昌泰4(901)年1月25日、



発掘された井戸

右大臣であった菅原道真は、大宰権帥に任命され、大宰府に来ることになりました。道真は水城の東門から大宰府に入り、この付近で衣服を着替えたと伝えられています。

その時、自分の姿を映した井戸(池)が、この井戸と伝えられ、のちに姿見井(姿見池)や鏡池と呼ばれるようになりました。

この井戸については、江戸時代や明治時代の書物にも記され、文政年間(1818～1830年)に編集された『筑前国統風土記拾遺』には、「町内に姿見井また鏡井といふあり。五尺四方民家の軒にあり」と記され、約15m四方の方形の井戸が民家の間にあつたことがうかがえます。その井戸も戦前までは山側から水が流れ込み、澄んだ水が溜まっていたそうです。戦後、山水が流れ込まなくなると、荒廃したため埋められました。

今回姿見井の景観整備を行うことになり、確認調査を行ったところ、奥行2.5m、幅1.5mの長方形に積まれた石垣が検



整備された井戸



出されました。石垣は花崗岩を4段ほど積み上げ、石垣の下には、石垣が滑り崩壊することを防ぐための丸太が敷かれています。石垣の高さは約1mで、旧道から井戸底までは深さ1.2mありました。また、旧道側には踊り場と排水路のような石組みも造られていました。この石垣の築造年代は不明ですが、おそらく近世以降に積まれたものと推測されます。

井戸の中には黒色の粘質土が堆積し、その下に砂層が確認されました。黒色の粘質土にはビニール、ビー玉、空き

缶などが混じっており、戦後井戸が埋もれていった様子が窺えました。調査で見つかった石垣や丸太は、崩落や劣化防止のため、埋め戻し保存されています。

現在は調査成果をもとに井戸の姿を想像できるように整備しています。井戸に水は溜まっていますが、池に敷かれた青色の玉石が水面を想像させ、運が良ければ青色の玉石に埋もれた石の窪みに水がたまっていて、自分の姿を映すことができます。

文化財課 宮崎 亮一

# 太宰府の文化財

324

## 霊峰 宝満山



宝満山遠景

宝満山は太宰府市の北東にあり、山稜は北東に延びて三郡山、砥石山、若杉山、南西側は愛嶽山に連なっており、九州でも最も人気のある登山の山として広く知られています。しかし、江戸時代のはじめに貝原益軒という黒田藩の学者が書いた『筑前国統風土記』という書物には、違った山の一面が説明されています。「竈門山」此山は国の中央にありて、いと高く、造化神秀のあつまれる所にして、神霊のとまります地なればにや、筑紫の国の惣鎮守と称す。凡国土には鎮守となれる山あり。」

宝満山は、かつて「竈門山」や「御笠山」という名称で呼ばれた時代がありました。峰が高く常にカマドから雲が立ち上るように見えたため「竈門山」と呼ばれたともいわれ、その神秘的な景観から神が留まる場所とみなされ『統風土記』では筑紫の国を鎮める中心の山とされていたと説明されています。また、『竈門山旧記』という江戸時代の宝満山にいた山伏が書き残した書物には「天皇の御宇都を太宰府に建玉う時、鬼門に当り竈門山の頂に八百万神之神祭りし玉ひ」とあり、この山が古代の役所「大宰府」の鬼門にあたる鎮めの場、という認識があったことを示しています。また、同じ書物には「天智天皇の御宇心蓮上人常に榕阿伽の水を以



市民による山中の見学会

て山中を修行す」とされ、法相宗の僧心蓮もまた伝説的な山を開いた人として描かれています。このように江戸時代までは霊峰として知られた山ですが、山に対する信仰は明治時代以降には竈門神社がそれを引き継ぎ、現在に至っています。しかし、近年の開発や自然災害、営林作業の停滞などで山中が変わりつつあります。そこで、太宰府市では平成17年度から21年度にかけて、文化庁からの補助を受けて山の総合的な埋蔵文化財の調査を行い、歴史的に霊峰とされてきた宝満山を、具体的な文化財という視点でその価値を再度評価する作業を進めてきました。その調査の過程では、「有智山城」といわれてきた中世の山城の調査や、天台宗を開いた最澄が発願して建てられたとされる六所宝塔の内の「安西塔」と呼ばれる推定地の発掘、竈門神社にあ

る「下宮礎石」の再発掘調査などを行いました。また、周辺で進んでいる耕地整理や民間開発などで行われた発掘調査の所見なども併せて、専門の先生方をお願いして宝満山の文化的な価値を総括する総合報告書を作成する作業が進行中です。平成25年にはこの総合報告書が国の文化財保護審議会に提出される予定で、歴史的な霊峰宝満山を次の世代に守り伝えるための保護が検討されています。

文化財課



推定六所宝塔跡での現地説明会

# 太宰府の文化財

325

## みんなで集おう「時の記念日」

【太宰府市民遺産 第6号】

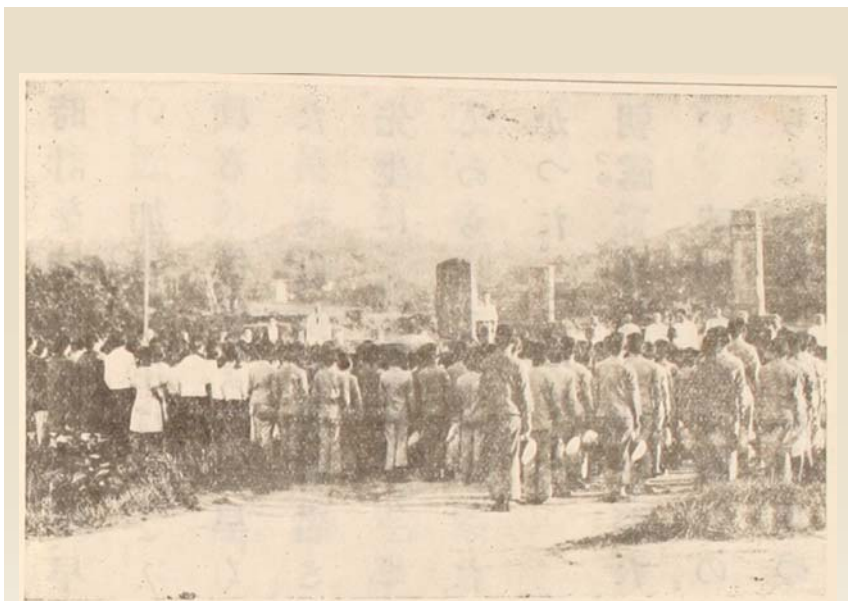
太宰府における時の記念日の行事

景観・市民遺産育成団体 辰山会



大正9（1920）年に東京天文台と生活改善同盟会が「時を守り、欧米並みの生活改

善・合理化を図ろう」という主旨のもと、「時の記念日」が制定され、翌大正10（192



▲郷土読本13頁

1）年から全国で記念行事が始められました。

太宰府でも、奈良時代に時を刻む漏刻が置かれたと伝えられる「辰山（月山）」を望む都府楼跡で記念式典が行われました（大正10年6月11日 福岡日日新聞朝刊）。その記事には、「天智天皇の漏刻を据え付けられし、とき山の前面なる都府楼跡にて挙行さる」と都府楼跡に参集する意味が記されています。その後、昭和12年に作成された『郷土読本（中）』（水城尋常高等小学校刊）にも「第五 時の記念日」として記されています。そこには、子どもの視点から、時計を持たずに支会ごとに、午前5時ちょうどを目指し、都府楼跡に集合する行事内容が記されています。そこでは皆集合した後に、時を計ること知ることの大切さと、天智天皇が築きし漏刻ある辰山を臨む都府楼跡で式典を行う意味について語られています。また、午前5時に集合する際に覚えた緊張感や、わずかの差で3等になったが、やっと入賞することが

できた喜びも語られています。都府楼跡で行われていた「時の記念日」の行事は、その時々

の話題となり（昭和39年6月10日 西日本新聞夕刊）、昭和40年代まで継続され、一時途絶えたものの平成の世になり城戸満（筑山）先生と教え子の方々によって再興され現在に至っています。全国で始められた「時の記念日」の行事は、多くの地で途絶えていますが、太宰府では多くの人の努力によって継続されています。「時」を大切に思う行事を、当初から継続している都府楼跡を舞台に、次代へ引き継いでいきたいということで、昨年の11月20日に太宰府市民



▲平成22年の時の記念日の行事

遺産第6号として認定を受けました。

今年の6月10日は、日曜日です。「フチ遅刻」が横行する今日この頃、社会の乱れにもつながりかねない自分の中の「時を粗末に扱う」気持ちにストップをかけるために、この日ばかりは、少し早めに起きて、時を大切に思う「時の記念日の行事」に参加してみませんか。そこで新たな出会いの輪が広がるかもしれません。

文化財課 中島恒次郎

### ●太宰府における時の記念日の行事（参加自由）

【育成団体：辰山会】

場所：太宰府政庁跡（正殿前）

日時：6月10日（日） 午前6時～

### ●認定太宰府市民遺産展 ギャラリートーク

場所：太宰府市文化ふれあい館

日時：6月10日（日） 午後2時～

※いずれも事前申し込み不要、参加費無料どなたでも参加できます。

# 太宰府の文化財

326

## 埋められた銭(緡銭)

### 観世音寺五丁目 鎌倉時代後期

平成24年度NHK大河ドラマ「平清盛」が現在、放映されています。その中でも触れられていますが、この時期(10～13世紀)になると、日宋貿易つまり日本と中国(宋)の

貿易が大変盛んになります。当時、日本から宋へ輸出したものは、金・硫黄・刀剣・漆器などがあり、逆に宋から輸出されたのは、香料・織物・陶磁器・書籍・絵画・



▲出土した緡銭3束 (大宰府条坊跡第210次調査出土)

宋銭などでした。今回はこの中で、宋銭について紹介したいと思います。

日本では古代から貨幣としての銭(銅銭)が作られてきました。それらは和同開珎をはじめとする皇朝十二銭として有名ですが、中世にはすでにあまり使われていませんでした。もともと宋銭が輸入されたのは、仏具などに使うための原材料目的と考えられています。この宋銭に目をつけたのが、後に大宰大式になった平清盛です。大量に輸入した宋銭を通貨として使った市場のコントロールをしていく目的があったのではないかと考えられています。鎌倉時代になっても宋銭を輸入することは盛んでした。その宋銭を、地面に穴を掘って大量に埋める行為(備蓄銭と言います)が行われ始めるのが、13世紀第4四半期(1275～1300年)あたりからです。大宰府での実例を1つ紹介したいと思います。太宰府市役所から北に位置する四王寺山を望むと、ちょうど真正面

やや東あたりに小高い丘がありました。これを朝日山といえます。この朝日山に長さ60m以上、幅7m、深さ2.3mという長大な堀が掘られていたことが発掘調査で明らかになりました。さらに調査成果をみると、その堀が埋まった後に、小さな穴を掘り、宋銭を300枚埋めていたことが判りました。この穴からは緡銭と呼ばれる銭100枚を紐を通して一つにまとめたものが3束出土しました。本来、緡銭では、省陌(省銭)といつ

て、中世では97枚、江戸時代になると96枚の緡銭を100文として使用するのが慣習なのですが、この緡銭はきつちり100枚を1緡にしている点の特徴といえます。最近の研究では、東北地方北部と九州では銭百枚で百文という丁百法が採用されていたことがわかってきました。300枚の宋銭のうち、一番新しい銭が景定元寶(初鑄1260年)なので、少なくともこの緡銭が埋められたのは1260年以降となります。当時の大宰



▲出土した宋銭の一部

府は大宰少式であった武藤氏が覇権を握っていました。少式氏の館があったとされる御所ノ内地区の背後の山にあたるこの場所に埋められていたこの銭は現時点では埋められた理由がよく分かりません。日宋貿易を契機に日本中に広まった宋銭の1つのありようとして備蓄銭は今後も注目されていくでしょう。

文化財課 高橋 学

# 太宰府の文化財

327

## 新指定された文化財

3月15日に行われた太宰府市文化財専門委員会の答申を受けて、5月25日付けで、以下の3件が新たに太宰府市指定文化財に指定されました。市指定文化財は、これで合計20件となります。

### ◎有形文化財(2件)

#### 相輪様

所在地：太宰府天満宮境内

社殿東側

この相輪様は、享和2(1802)年、菅公900年忌あたり、博多の商人らによつ

て発願奉納されたもので、博多鋳物師として活躍した山鹿氏によつて鑄造されたものです。中央に塔を簡略化した柱を立て、その柱を支えるために四隅に脇柱を立てており、中央柱は高さ6m、脇柱は高さ2.4mです。



▲相輪様



▲六座の面

### ◎天然記念物(1件)

#### 太宰府天満宮のイチイガシ

所在地：太宰府天満宮境内

社殿東側

このイチイガシは、社殿の東側、中島神社の裏手にあります。樹高は約20m、幹の南側半分が欠損するものの、樹勢は旺盛で、枝は八つ手状に大きく広がっています。幹周りは約5.4mを測り、同種としては市内最大であり、福岡県内でも最大級の大きさを誇ります。



▲太宰府天満宮のイチイガシ

明治の神仏分離令により、太宰府天満宮では仏教色の明らかかなものは取り壊しや移築が行われたため、現在境内に所在する天満宮安楽寺の建築物としては唯一のものとなっています。また、全国的にも数少ない建築物として貴重です。

### 六座の面附納入箱

所在地：太宰府天満宮宝物殿

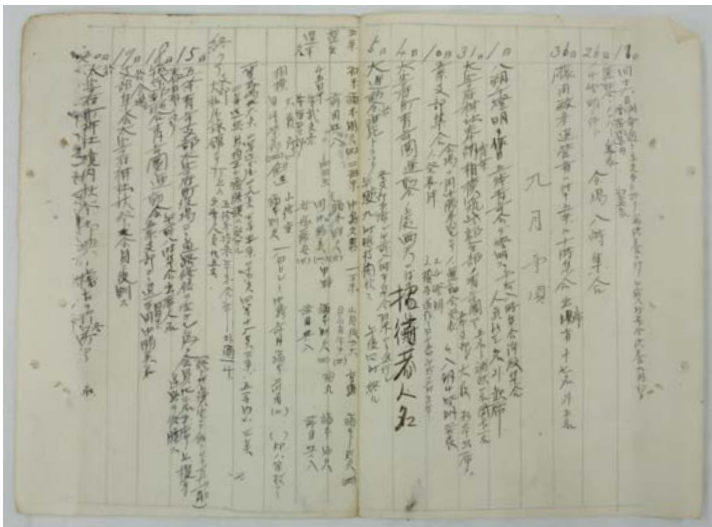
六座の面は、中世後期の作と考えられ、美術史的には近世になって定形化された能面より古い要素を持っています。これらは、かつて宰府や観世音寺にあった祇園社に能が奉

# 太宰府の文化財

328

## 五条青年会の昭和七年の日記 — 五条公民館文書 —

昨年、五条公民館に古い文書類が保管されていることが分かりました。大正から昭和にかけての、五条区の会計資料や、区の青年会の日記などでした。今回は、その文書類（五条公民館文書の1つ、五条



▲五条青年会の昭和7年9月の日記の一部（五条公民館所蔵）

なお、この日記をはじめ五条公民館文書は、太宰府市市史資料室で画像資料を閲覧できます。

の青年会の日記を紹介します。日記には、今からちょうど80年前の昭和7（1932）年1月から10月にかけての青年会の活動記録が書き記されています。

15日に町役場の依頼を受けて、榎寺の道路を修繕したこと、そして25日には太宰府天満宮で大運動会が開催されたこと、

いました。その日記の9月の部分をお見せします。

1日に「八朔の千燈明」※が

青年会で行われたことや、5日に太宰府町内の青年団対抗で大運動会が開催されたこと、

15日に町役場の依頼を受けて

榎寺の道路を修繕したこと、

そして25日には太宰府天満宮

で大運動会が開催されたこと、

15日に町役場の依頼を受けて

榎寺の道路を修繕したこと、

そして25日には太宰府天満宮

で大運動会が開催されたこと、

15日に町役場の依頼を受けて

榎寺の道路を修繕したこと、

そして25日には太宰府天満宮

で大運動会が開催されたこと、

15日に町役場の依頼を受けて

榎寺の道路を修繕したこと、

そして25日には太宰府天満宮

で大運動会が開催されたこと、

15日に町役場の依頼を受けて

榎寺の道路を修繕したこと、

そして25日には太宰府天満宮

で大運動会が開催されたこと、

15日に町役場の依頼を受けて



▲2011年の八朔の千燈明のようす

ことなどが記されています。大運動会では、町内の青年団の5つの支部が、陸上競技の他に相撲や剣道で競ったようです。五条青年会からの出場者が各競技で上位に入ったことや、各支部の総合点数と順位が記され、馬場区の青年会が2年連続で優勝したことなどが簡潔ながら事細かに記録され、当時の若者たちの活気を感じられる内容です。

記事の中にお名前が登場する方々はもう亡くなられ、当時のことを語ることができません。こうした記録もまた、五条、そして太宰府の昔を知ることのできる大切な文化遺産です。

けでした。このように、ひとつの文化遺産を起点に、別の文化遺産にも触れ合うことができ、思わぬ広がりをもたせることができます。ぜひ皆さんも、まずは身近にある文化遺産から目を向けてみてはいかがでしょうか。

この日記をはじめ五条公民館文書が見つかったのは、太宰府市民遺産第2号「八朔の千燈明」※について育成団体の五條風の会の方と調べている際に、地元の方から「そういえば古い文書が公民館にある」と情報が寄せられたのがきっかけです。

※「八朔の千燈明」は、毎年9月1日に五条区の方々と続けられている太宰府天満宮で献灯をする行事です。今年も当日夜8時頃、天満宮の楼門前で行われます。

文化財課 遠藤 茜



# 太宰府の文化財

329

## 齋藤秋圃と齋藤家の画稿

江戸時代の後期、町人文化が爛熟期を迎えた文化・文政期（1804～1830年）のころ、筑前を舞台に活躍した絵師の一人に、齋藤秋圃がいます。

郭の様子を哀歓豊かに描いた版本「葵氏艶譜」は、このころの秋圃の代表作として知られます。

秋圃は、生没年や出生地などに諸説があり、経歴に謎の多い人物ですが、これまでの研究で、明和5（1768）年に京都に生まれ、円山応挙や森狙仙を師と仰ぎ、上方の風俗絵師として名を上げたと言われています。大坂・新町の遊

その後、大坂を離れ西下の旅に出た秋圃は、厳島を経て九州に至り、文政2（1805）年、秋月藩の御用絵師に登用されます。この間、清国から長崎に渡航して日本の文人画家に影響を与えた江稼圃とも交わりを結んでいます。

文芸を好む秋月藩主・黒田長舒に画才と機転をもつて仕



▲齋藤秋圃自画像（個人蔵）

えた秋圃でしたが、長舒の没後は、藩内の政変や妻の死、長男の江戸での出奔など、心労が続きました。仙厓和尚をはじめとする人脈に支えられ、博多商人らの薦めもあって、秋圃は太宰府天満宮の五別当の一つ、御供屋信覚法眼の姉・富を後妻に迎え、これを機縁に太宰府錦之町溝尻に住まいします。秋圃、太宰府時代の幕開けです。

門前の町絵師となった秋圃は、以後30年に及ぶ長い年月を太宰府で過ごし、太宰府天満宮九百五十年祭の折には万画奉納を行うなど、練達の技法で多くの作品を生み、格式張らないおらかな画風で人々の心をとらえました。

平成15（2003）年、齋藤家の旧宅が移築される際、木箱に入った大量の資料が見つかりました。そのほとんどは画稿と呼ばれる作品の下絵や写生図で、総数1700点のほりです。秋圃、あるいは三男・梅圃の手になるものではないでしょうか。中には、秋圃最晩年の作で、現在は福岡市博物

館所蔵の「馬上人物図」の下絵

と考えられる図も含まれていました（左図参照）。完成作品とは別に、これほどまとまった画稿類が町絵師の家に伝わる例は、全国的にも珍しいといわれます。郷土の貴重な資料の解明が進み、分野を超えた活発な研究が待たれます。

やがて太宰府では、秋圃に絵の手ほどきを受けた萱島家・吉嗣家の絵師たちが数代にわたって活躍をとり、各地の文人墨客との交流を紙幅に留め

ます。秋圃は、その優れた絵筆をもって、太宰府に絵画愛好の新たな文化を花開かせる起点となりました。

現在、文化ふれあい館では、市制施行30周年記念「まるごと太宰府歴史展」を開催中です。齋藤家のご厚意により、秋圃の画稿の一部を展示でご紹介しています（11月4日まで）。秋の一日、どうぞお出かけのうえ、ご観覧ください。

太宰府市文化ふれあい館  
学芸員 井上 理香



▲「馬上人物図」（福岡市博物館蔵）



▲下絵（齋藤家蔵）

# 太宰府の文化財

330

## 少弐氏と貿易陶磁器

観世音寺五丁目 鎌倉時代後期



▲御所ノ内地区から出土した龍泉窯系青磁坏

太宰府市役所の北側に、「御所ノ内」という小字が残っています。江戸時代後期に製作されたと考えられる古地図『大野城太宰府旧蹟全図北』にも、同じ場所が「御処ノ内」とあり、「御所」、すなわち有力者の館があったことがうかがえます。

小字の範囲は東西約175m、南北150m程度の長方形で、発掘調査により13〜14世紀代の遺跡が広がっていることが確認されています。調査の結果から、この地区では多くの掘立柱建物が建てられていたことや、他ではみられない石敷きの道路、土蔵の基礎とみられる石敷遺構などの特殊な遺構が集中しており、同時代の他の場所とは違う特別な場所であることがわかりました。

この地区からは遺物（当時の人が使っていたもの）がたくさん出てきました。その中でも、外国から輸入した貿易陶磁器と呼ばれる青磁・白磁、陶器等の器が目につきます。そのうちの1つ龍泉窯系青磁

は、中国南部の浙江省の窯で焼かれた青磁です。その特徴は青みを帯びた緑色に発色する釉を塗り、外面に蓮の葉をモチーフにした蓮弁と呼ばれる文様を器の外側に彫り込んでいくものが多いことがあげられます。

御所ノ内地区で出土する青磁は釉が厚く丁寧に施されて、より釉の発色に深みが増している優品が多いことが特徴的です。

貿易港であった博多には当時多くの貿易陶磁器が荷揚げされていました。消費の中心地であった京都や鎌倉に並んで、太宰府にも多くの陶磁器が運ばれました。少弐氏は独自に貿易船を中国などに派遣しており、太宰府で出土する陶磁器もそれらの貿易によって太宰府にもたらされたものかもしれません。

他地区とは違った建物が建



▲市役所屋上から見る御所ノ内地区

ち並び、外国の高価な器が集中して出土することから、御所ノ内地区は13〜14世紀を中心に太宰府を拠点として活動していた少弐氏の居館があった場所、つまり「少弐氏守護所跡」の可能性が高いと考えられています。

御所ノ内地区から出土した貿易陶磁器は、当時の少弐氏の活動を知る重要な手がかりです。

文化財課 高橋 学